

明星大学

# 日本文化学科紀要

第三十二号 令和六年三月

題目	筆者
新作能〈蛙ヶ沼〉の再考・新演出について	田村良平（村上 湛）

Department of Japanese and Comparative Culture

School of Humanities

no. 32 2024

Bulletin of Meisei University

ISSN 2186-2818

# 新作能〈蛙ヶ沼〉の再考・新演出について

田村良平\* (村上 湛)

## 【堂本正樹作 新作能〈蛙ヶ沼〉梗概】

知神「アポロン」に仕える巫女が謎の神示を受け、「デイロスの浮島」を訪れる。昔、主神「ゼウス」の愛を受けた女神「レイトウ」は、ゼウスの正妻「ヘラア」の憎しみを受けて出産の地を失い、この島でようやくアポロンを生んだのだ。レイトウが水を欲したように、巫女もまた渴きを癒そうと池に近づくや否や、不思議なことに水はたちまち濁ってしまう。

そこに出現した怪しい男が、「水を澄ませてさし上げよう」と池に向かって手を振ると、言葉どおり濁りが消える。清水は飲み得たものの不審の念を抱く巫女に対し、男は蛙の化身であることをほめかす。「この沼はもともと、澄んだ水の湧く清い池だった。ある時、幼な子を連れた美女が通りかかり、飲み水を乞うた。情欲を催した男たちはみだらな誘いを持ち掛けるも、拒まれ、怒りに任せて水を濁らせ腹いせをした。女は激怒。『この男たち全員、醜い蛙と変じて、千年に一度のみ人語を発するほかは未来永劫、悔やみ嘆き続けるがよい』……その美女こそ、恐る

べき女神レイトウの化身であり、無知蒙昧にして呪われた男たちは、澱んだ古沼にうめく蛙となった。

恐ろしい物語を明かした蛙の精は、夕闇に紛れ、沼の中に消える。

別のヒキガエルが沼から現れる。そこに訪れた男は、ヒキガエルとなった老人の孫である。懐かしさのあまり慕い寄ったヒキガエルは、みずから人間の化身であると理解されず、不快なカエルに敵意を抱く孫に叩き殺される。

夜。レイトウに呪われた沼に無数の蛙が鳴き蠢く中、巫女はアポロンに祈りを捧げる。千年に一度、人間に戻り人語を解する時が至り、出現した蛙の精。心操つたなく醜い姿となった因果応報を悔やみ、直接の罪もない妻や子までも沼に落ちて死んだ非業の最期を嘆くと、永遠に尽きることのない業苦に懊悩しながら消えてゆく。

## 【新作能〈蛙ヶ沼〉とその周辺】

ギリシア神話に出てくる地名・人名にはさまざまな日本語表音がある。本作の中の用例もしかり、「ヘラア」はヘラ、「レイトウ」はレイトーあるいはレトと記されることが多い。「デイロス」はエーゲ海に浮かぶデロス島である。

ゼウスの子を身ごもったレトに対してヘラは、「世界中のどの地上にも出産する場所を与えない」呪いをかける。海神ポセイドンが密かに保護し、ヘラの呪いをそらすべく、地上ならぬ浮島のデロス島を波で隠したので、そこでレトはアポロンを生むことができた。アポロンは月の女神アルテミスと双子で、両神とも名高く人気も高い。レトが水を飲めなかった泉は現在のトルコ・リュキアにあったと伝えられる。大規模な連

\* 日本文化学科 教授 平安時代物語文学・芸能演劇

合都市国家を形成していた当地には彼女を祀る古代神殿の遺跡が残り、レト信仰の盛んだった往時の繁栄を偲ばせる。

古く戦国時代に既成演目の反復上演が主流化した後も、能の新作がまったく生み出されなかったわけではない。世阿弥が整備し、時代と共に定型化した能本の構造は比較的単純だから、謡曲の稽古に狎れた者でちょっとばかり文才があれば、それらしい能は誰でも書ける。だからこそと言すべきか、真の意味で偉大な詩劇・戯曲と称するに値する新作能は江戸時代以降ほとんど生み出されていない。

表章(一九二七～二〇一〇年)と並び戦後の能楽研究を牽引した横道萬里雄(一九一六～二〇一二年)は、表にいささか欠けていた「能劇」の思想を追究し、みずからも筆を執って新作能を作りなした。アイルランドの詩人イエイツの劇詩〈鷹の井戸〉(一九一六年)を翻案した〈鷹の泉〉(一九四九年)、その改作で現在も上演を重ねる〈鷹姫〉(一九六七年)である。早熟の鬼才・堂本正樹(一九三三～二〇一九年)が若き日に書いた〈蛙ヶ沼〉(一九五五年)は本人も述べるように(後述)、横道の影響を強く受けている。

ケルト神話に基づくイエイツの原作は、明治の名人と謳われた初世梅若実(一九二八～一九〇九年)による上演を想定して書かれたと言われる。もともと能を摸したこれに取材した横道からさらに一步を進め、ギリシア神話に取材した堂本の〈蛙ヶ沼〉は誰も知る物語ではなく、むしろマイナーな逸話を扱ったところがミソである。

ギリシアの神々はみな激越な性格の持ち主だ。それだけに神々は短気であり、移り気である。レトが産み落としたアポロンは美しく若い男神で、芸術文化を守護する知の神であると同時に、意に反した者を罰する

残虐も辞さない。女神の中で最も柔和な部類に属するレトですら、ヘラの妨害で安産の女神エイレイテュイアの守護を受けられぬまま九日夜、難産の苦痛に耐え抜いた。旅の美女の正体を知らず、たまさか邪な淫慾を抱いて意地悪した男たちは、たちまちレトの逆鱗に触れ醜いヒキガエルに変えられて、永遠の苦悩のまま生き続けなければならない。これは〈鷹の泉〉(鷹姫)の老人が、百年に一度だけ清水の湧き出す泉を守護しながらも、肝腎の時には昏々と眠りこけ、永遠に待ち続ける運命にあるのと通底する。

〈蛙ヶ沼〉の収録された作者の処女出版『僕の新作能』後記に、自身の創作活動について「万里雄さんが居無かつたら」どれ丈感謝してるか判らない」と、横道に寄せる熱烈な謝辞を吐露しているように、喜多流シテ方宗家・喜多実の求めによって書かれ実際に上演もされた横道の初案〈鷹の泉〉こそ、若き日の堂本にとって新作能の原風景だっただろう。これらは美文を連ねただけの陳腐な「それらしい能」とは全く異なる、能の本質を見定めて創作された、前衛的な詩劇である。

囃子事に精通していた横道の〈鷹姫〉は斬新な作曲技法で鞏固に構築されている反面、元は理学部出身で理数系の横道自身「文学の人」ではないだけに、修辞が生硬で余韻に欠ける。これに対して、囃子事に疎かった堂本はその点では抽象的な指示しか与えられないが、尖鋭的な劇作家・演劇評論家たる「文学の人」だけに、劇的趣向と詩的表現に優れている。千年に一度だけ人語を発するシテ・蛙の精と、二十年前に変身した間狂言・老ヒキガエルの関係性が曖昧で説得力を欠く(作劇上この欠点は覆いたい)など、若書きゆえの筆力不足も散見されるとはいえ、予想外の神罰を受けて不条理の沼に沈む蛙Ⅱ人間の業を扶け出す視点に

は精彩がある。劇中、執拗に反復される「愚詠、業々」の呻きは、蛙の鳴き声をパロディカルに写したものの。人間の発するコトバとはしょせん愚かな詠歎に過ぎず、業の深い贅言だ。

一般の能のワキは必ず男性であるのに対し、〈蛙ヶ沼〉でこれに相当するのは巫女つまり女性である。一九六三年二月、東京・梅若能楽学院会館能楽堂における堂本の結婚式では、アイスキュロス作〈アガ멤ノン〉から「カッサンドラ狂乱」が自身の演出で抜粋上演された（『三島由紀夫の演劇』）。百発百中の予知能力を具えながら、アポロンの呪いを受けて誰にも信じてもらえない美女カッサンドラは演劇的憑依の表象である。この能でも、アポロンとその母レトの神意を体する憑依の巫女が、神慮に背く劫罰を受けた愚かな人間＝蛙たちの運命を透視する。

#### 堂本正樹作 新作能〈蛙ヶ沼〉上演詞章

〔底本〕一九九九年「能劇の座」記念公演版（一九五五年

『僕の新作能』初稿版に基く、原作者による改訂版）

※全体の小段構成は今回の新案に拠る。《》は囃子

事、「」は小段、「は」はコトバ、へは節を示す。

1・アポロンに仕える巫女が謎めいた神示を受け、デイロス島を訪れる。

#### 《アシライ》

〔次第〕

地謡へ来たれる方も去る方も、来たれる方も去る方も、知らねど運命知らるる。

〔語り〕

巫女「おう、ここはデイロスの浮島にて候、昔天なる父神ゼウスに想はれて、孕みし女神レイトウは、ゼウスの妻ヘラアに追はれて地を迷ひ、やうやうこの島にて子を娩むを得しと承り候、その時のおん子こそ、我が仕ふるアポロンの神

へ我が神の示しに否む術なく、われ今この浮島に至りたり

「神は何をわれに求め給ふ、何に遣はせ給ふや、アポロンは天空にあり、

その神の誘ひの宛て処も無く

へ余りに苦しき旅路、せめては水を……、あゝ、曠野は茫茫として人影もなく、緑も枯れて大地は骨片を敷くに似て白し

「や、これなる丘の窪に籠り沼の候、水は混沌と澱むに、僅かに生ふる草の茂みの中には、泉とも見まがふ清水なり

へ不思議ながらも嬉しやと、間近う寄つて飲まんとすれば

〔上ゲ歌〕

地謡へ清水の底の忽ちに、清水の底の忽ちに、曇り濁りて散り広がれば、飲むべくも無し、浅ましや

2・水を飲もうとしても濁つて飲めぬ巫女の前に、怪しい男が現れ、水を澄ます。

〔問答〕

男「のうのう、その清水澄まし申さん、暫く待たせ給へ

地謡へ愚詠、業々、愚詠、業々

巫女へ水芦騒ぐ向かひの岸より、来たれる人の言葉は何ぞ、人か獣か覚束な

男「誰・彼よりも先づ水をと、立ち寄る影はかげろふの

巫女へ声も姿も

男へ見え、隠れつ

〔上ゲ歌〕

地謡へ水に向かひて手を振れば、水に向かひて手を振れば、流石濁れる  
沼水の、澄みし清水を汲み給へ、一つわれらの袖ひぢて、参らせん旅  
人、緑の水ぞ頼もしき

3・侮辱された女じつは女神の呪いにより里の男たちが蛙と変じ、清  
水も濁り沼となった昔を語り、怪しい男じつは蛙の精は水中に消え  
る。

〔問答〕

巫女「おん出でによつて渴きを潤して候、またおん言葉を承るに、人の  
言葉には似たれども、また枯れ枯れにすがたれて、聞き取りがたきは  
不審なり

男「聞き取りがたきとは仰せあれど、申さん事のあらかたは

巫女「げにその言葉の受け、応へを

男「なし得し事は、いつよりぞや

へおん姿を見奉れば、神に仕ふる人なるべし、昔を思ひ悔しさに、真清  
水も濁る我が命、業却の尽くる時はいつ

□□

地謡「愚詠、業々、愚詠、業々、愚詠、業々、愚詠、業々

〔問答〕

巫女「聞けば水面に蛙の声、さも姦しく湧き起こるぞや  
男「今この沼の名は蛙ヶ沼、人恋しさに浮き上がり、鳴くぞとこそは思  
し召せ

巫女「獣と人の半ばの言葉を、語れる人の謂はれはいかに、もしや我が  
神の示しの所は、この蛙ヶ沼にてあるやらん

男「おう、その縁こそ頼むなり

〔語り〕

男「この沼の昔は清く水湧く清水にて、常に島人集ひてさんざめく、あ  
る時、幼児を抱きし母一人、この池に来たりて水を請ふ、里人らその  
女人のあまりの美しさに、よこしまなる思ひをなししも、拒まれし悔  
しさに水を与へず、まして池に入り水を掻き濁す、その時女憤りを天  
に吐くは、ゼウスよ、これらの里人は呪はるべし、その一人たりとも  
ここを去らせじ、世終りまでこの池の蛙となつて、千年に一度人の言  
葉を与ふる外、我がなせし業を醜き声にて、悔やみ嘆けよ、と

地謡へ叫ぶと同じく女は、輝く女神と、我らは醜き蛙と変じたりけり

□□

地謡へ愚詠、業々、愚詠、業々

〔歌〕

地謡へそのまま水に浮き沈み、悲しむ声も枯れ枯れに、今も醜き鳴き声  
を、聞こし召せ巫女、恐ろしの呪ひやな、夕陽も傾きぬ、芦影も色深  
し、蛙の声も重くれて、水暗む時なれや、恥づかしや我もまた、蛙の  
精と名乗り捨て、沼面の水藻押し分けて、水の底に沈みけり、水の底  
に沈みけり

□□

地頭へ業・劫……沼は深し数千年、その昔の再び、現るる幻こそ、うつ  
つの中のうつつ

4・ヒキガエルとなった老人の前に、孫である里人が現れるが祖父だと  
は気づかず、ヒキガエルは叩き殺される。

老蛙「これはこの沼に棲む蟊蛙でござる、某も古くは人間の端くれでござつたが、さる時ふとした過ちがござつて、かやうのすがたとなつてござる、昨日今日とは思ひながら、はや二十ヶ年にもなりませうか、今日は良い天気でござるによつて、岸に上がつてみようと思ひまする。ブクブクブク、スルスルスル、バチャツ、やつとな、さてもさても、暗い沼野の底とは違つて、土のかをりは云ふに云はれぬ懐かしいものでござる、石くれ土くれ、草の葉の一つ一つにも、過ぎし方の思ひに繋がらぬものとはござない、いやいや、云うて帰らぬ事でござれば、暫くこれにてまじろまうと存ずる

里人「これはこの辺りに住む里人でござる、今日は天気も良く、風も心地よく吹きますれば、蛙ヶ沼の辺りに参り、心を慰めうずると存ずる。まことに蛙ヶ沼と申すは、蛙の沢山棲む沼にて、我らの親父殿の親父様は、昔このあたりにて神隠しに遭ひ、行方知らずになられたと申す、この爺様には、我らも童の時分に随分と可愛がられた、肩車をして貰ひながら居寝て、寝小便をしたと申すが、少しも叱らせられなだんど承るぞ。いや何かといふうちこれは蛙ヶ沼ぢや、ハーツ、まことにどんよりと深い沼かな、これならば人がはまつても、死骸の上がりやうもござるまい、まことにいたはしき事かな、いや、遠出の慰みにここに地酒を一つ用意した、せめての手向けといたしませう、オツトツトト、あまりに手向けをしては某の分が減る、あとはこの喉に手向けませう。やつとな

老蛙「あ、寝た事かな寝た事かな、ハテ、何やら良い匂ひがいたすが、何事ぢやしらん、さてこそあれに人間が来をつた、石投げられてはな

るまい、ポツチャン、いや、あれはどこやらで見たやうな顔でござる、あれは誰であらうぞ、近寄つて見ねばなるまい、思ひ出した、あれは身共の孫でござる、こゝ、小鼻の脇のほくらが証拠ぢや、さてもさても、暫く見ぬうちにいかう成人した、身共がゐた頃はよちよち歩きでござつたが、今は天晴れ若い衆でござる、定めて女子供も出来たでござらう、嬉しや嬉しや、この果報を得やうとは、夢にも思はなんだ、あら懐かしや孫よ、父は達者か母は堅固か

里人「この蟊蛙は急にゲロゲロと鳴き出した、さてもさても姦しい事かな、それに身共に近寄つて来る、あた忌々しいあちへ失せいあちへ失せい

老蛙「これはいかな事、あちへ失せいとぬかしをる、やあやあ、爺に向かつて何を云ふぞや

里人「また鳴き出した  
老蛙「孫よ孫よ

里人「あゝ、汚い事かな、蛙奴がここに飛びつきをつた、もう堪忍がならぬ、叩き潰してやらうぞ、あやあこのどぶ蛙の古蛙奴、これをくらつて往生せい

老蛙「これは非道な、爺を殺すといふ事があるものかいやいあるものかいやい

里人「下汚い蛙の分際で、人間様に向かつて来るさうな、いよいよ堪忍がならぬ、エイやあ

老蛙「あ、痛やの痛やの、先づ待つてくれい、先づ待つてくれい  
里人「この、この、この蟊蛙が

老蛙「わあ、助けてくれい助けてくれい、そなたが童の頃、どれ程身共の世話になつたと思ふぞ、爺に抱かれさへすれば、今までどれ程むづ

がつてゐても、泣きやんだそちではないか

里人「その鳴き声が汚うて我慢がならぬ、姿形も醜うてふためと見たうもない、ましてや人に飛びつくどは身の程を知らぬ、エイやあ

老蛙「ギヤア、グチャヤツ

里人「やうやうくたばつたさうな、さてもさても小気味よい事かな、いや、臍物のはみ出た腹をさらした死にやうは、何とも浅ましいザマでござる、いや、我らの子供が、蟹を釣る餌に裂いた蛙が欲しいと申してゐたによつて、これをもつて行つてやらうと存ずる、されども手持つはあまりに汚うござるによつて、足で蹴りながら帰らう、それ、やつとな、やつとな、ハハハハハハ

## 5・巫女がアポロンに祈りを捧げる。

□□

地頭へ愚詠、業々、沼は深し数千年、その昔の再び……

〔ノリコトバ〕

巫女「アポロン、アポロン、おん身のおん母の屈辱の沼に、閉じ込められし者の声を、我に聞き分けさせ給へや、アポロン

〔サシ〕

蛙精へ夜は長しとも朝ありとは、いづくの国の理ぞや

〔一セイ〕

地謡へご覧ぜよ目のあたり

蛙精へ明けぬ夜もあり、明けぬ夜もあり

地謡へ恐ろしや

## 6・蛙の精が現れ、女神レイトウの怒りによつて人身を奪われて、千年

に一度のみ人語を発する呪いを掛けられた身を嘆く。

〔掛ケ合〕

巫女へ騒ぐ水面に浮かみ出で、岸を慕へるその姿、さも浅ましき古蛙

蛙精へ蛙は岸に這ひ上がり、我をば厭ひ給ふなよ

巫女へ姿は蛙声は人

蛙精へ一千年にただ一度

巫女へ人と言葉を蛙沼

蛙精へその一日は巡り来て

巫女へ逢ひにあひたり

蛙精へおん巫女よ

〔上ゲ歌〕

地謡へレイトウのおん子アポロンに、仕へます人ならば、罪を宥め

てたび給へ、蛙ケ沼の罪咎

〔クセ〕

地謡へ懐かしやいにしへは、懐かしやいにしへは、共に貧しく、憂さも

等しく飢ゑもまた、われ共に担へば、他を知らぬ、浮島の楽しみ

蛙精へされど初めて、輝く女人を見そめては

地謡へ珍しきに驚き、美しきに思ひおこり、その綺麗を妬み、浅ましき

修羅に、捉へられて我を忘れ、我と招きしこの因果ぞ、罪の報いぞ恐

ろしき

□□

地頭へ女は怒りて去りぬ、さて

蛙精へ我らも、我が家に帰らんと

〔中ノリ地〕

地謡へすれども、見えぬ手の手を掴み、足首を留めて、沼を離るるやうぞ無き、こはいかにともがきつつ、水に映れる影を・見れば

蛙精へこは、蛙

《立回り》

地謡へこは我が、我が影か、見れども、見れども我が姿なりけり、皆々蛙に変はりけるぞや、恐ろしや

7・女神の呪いは自身のみならず、妻や子にまでも及んで死に至らしめた悲劇を語り、蛙の精は救いを求めつつ虚しく泣き叫ぶ。

〔サシ〕

地謡へ見返れば女は、輝く女神となり、怒りの眼尖り矢となつて、醜き蛙共を射貫く、許し給へ我が咎

〔中ノリ地〕

蛙精へげに恐ろしき身の運命

地謡へげに恐ろしき身の運命、我らの還らぬ事を案じて、夜に入り村の人々、松火をかざしつつ、この池の辺に尋ね来る、こは嬉し、我よこよと答ふれども、甲斐なきも理や、彼は人われは蛙

〔ノリ地〕

地謡へ遠ざかり行く松火の、影遙々と見送りて、皆々岸に伏しまろび、声を限りに叫べども

〔語り〕

蛙精「身は蛙なりけり、我が持てる一人子の、父よ父よと呼ばひつつ、その後一人来たつて、そこやかしこを尋ね果て、芦の葉茂る深間に、足を取られてずると、引き込まれ溺れ死にぬへこれ報いか浅ましや、かくて清水の湧きし池は、蛙ヶ沼と濁り果て

たり

〔歌〕

地謡へそのみか我が妻の、そのみか我が妻の、夫を失ひ子を死なせ、心も空にこの沼にて、夫・我が子の幻を、追ひ求め踏み入り、これも空しくなりにけり、あまりにむごや凄まじや、取り付き嘆くわれ蛙、二人の、骸は歳月に、白骨と変はれども、我は変はらぬ沼蛙、永劫の変身悲しやな、助けて給べや神々、取り次ぎ給へ巫女と、泣き叫ぶ声々は、愚詠業々、愚詠業々

□□

蛙精へ愚詠々々

地謡へ愚詠業々、愚詠業々、愚詠業々、愚詠業々、愚詠業々

蛙精へ愚詠業々

〔次第〕

地謡へ来たれる方も去る方も、来たれる方も去る方も、知らねど運命知らるる

二〇二三年上演版 堂本正樹作

新작能(蛙ヶ沼)再演出プラン]作成・村上 湛

★原則として一九九九年「能劇の座」上演版(以下「原版」と称す)に基づきつつ、演出面で随所に新しい工夫を加えた。詞章・節付・手付は殆ど原版どおりである。

★今回の新案で新たに「女神レイトウ」(後ツレ)を配役した。後場のみ登場しわずかな所作を見せる黙役だが、全体が人間のみによるドラマではなく、「女神の視線」が常に張り巡らされている点に悲劇の本質が



あることを暗示する、大切な役である。作者・堂本正樹が兄事した横道萬里雄の〈鷹姫〉鷹姫役をイメージしても良い。

★原版と大きく異なる点を大まかに述べると、以下のとおりである。

- 1・女神レイトウ役を新たに創作した。これに伴い作り物の性格も変え、原版での「蛙の精の住む水底」から、「女神レイトウの居処」に変更した。
- 2・ワキ(巫女)は自然木の杖(原版)ではなく降霊の呪具である弓を杖に突き、霊媒師役であることを強調した。
- 3・前シテ(男じつは蛙の化身)は作り物から(原版)でなく幕から出る。これに伴い中入も作り物へではなく幕へ入る。
- 4・間狂言の間、ワキは鏡板前へクツログ(原版)ことはせず、脇座下居のままである。
- 5・オモアイ(老蛙)は、作り物背後(原版)からではなく、幕から出る。
- 6・アドアイ(里人)の持つ酒器は小型酒器(原版)ではなく、銀塗り大瓢箪および酌扇に変える。
- 7・後シテ(蛙の精)は作り物から(原版)ではなく幕から出る。
- 8・後シテが最後、水衣を抱き妻子の白骨に見立てる型(原版)は取り止める。
- 9・最後はシテが作り物に入る(原版)のではなく、幕に入る。その後ツレ(女神レイトウ)が一人で舞台に残り、脇能のシテのようにトメる。

## 【面と装束】

前シテ・男じつは蛙の化身

面・蛙。バス鬘。着付・小格子厚板の類。水衣。腰帯。手に何も持たず。

★原版では胡麻塩を用いたが、黒髪のほうがヌメっと湿った怪しさが出る。今回は黒髪とした。

後シテ・蛙の精

面・悪尉の類。白頭。着付・厚板。袷法被。半切。鹿背杖(紺緞巻)。鬼扇。

★原版では緑彩色の創作新面に合わせ薄緑の足袋を履いたが、今回は古作定型の面に常の白足袋とする。

後ツレ・女神レイトウ

面・橋姫または増。黒垂。紅入鬘帯。輪冠(月輪立)。衿・白/浅黄着付・赤地鱗箔。白地袷狩衣(衣紋に着る・露は緋色)。赤地半切。繡紋腰帯。童扇。

★ワキ・巫女は男神・アポロンに仕える者であるにもかかわらず、能は母神・レイトウにまつわる物語である。ここに矛盾があるが、それを反映して男装の女神姿として両性具有を示す。同じく男女両性の神格を示す喜多流(三輪神遊(絵馬女体)で「女面に袷狩衣」という異例の扮装となるのを写したものである。当日の面は橋姫を用いた。

ワキ・巫女

白花帽子。輪冠(立て物ナシ)。着付・摺箔。白地縫箔腰巻。白地長絹(露は緋色)。

金無地中啓(懐中して出る)。持ち道具・作り物の弓(紅緞と紅色ボウジで巻く・結弦は張らず)。

★花帽子に金色の輪冠を重ねることで古代希臘の女らしく装う。弓は

降霊の呪具だが若い女の持ち道具にふさわしく美麗に作る。弓杖に用いるので(放下僧)のような短寸ではなく長い実寸で作り、結弦は張らない(弓の実物を借り受け、これを芯にして作ると最も良い)。

なお、当日は輪冠ではなく前天冠を用いた。

オモアイ・老蛙 面・賢徳。 頭巾。着付・茶色無地熨斗目。腰帯。括袴。脚半。

アドアイ・里人 半上下出立。鎮扇。銀塗り大瓢箪(腰に付ける)。

### 【作り物】

一畳台 棕櫚小屋(三輪)に同じく白ボウジで巻き、萌黄引回シ掛ける。前面に棕櫚杖を挿す)

★ギリシヤ神話でレイトウは棕櫚の木に寄り掛かって男女二神(太陽神アポロンと月神アルテミス)を出産した故事から、棕櫚小屋は女神の住処を象徴する。

### 【舞台展開】

★一九九九年版(原版)と異なる点を中心に述べる。特に言及なき部分は原版を踏襲した。

★実際の上演に際しては、当然のことだが、大槻文藏氏の演技に数ヶ所、指定と異なる好工夫がなされた。

### 【前場】

・作り物(後ツレ入る)は笛座前でなく大小前に据える。舞台を威圧する感を出す目的である。

・笛一管入り大鼓一調で始曲。続いて地謡次第。以上はいちおう原版のとおりだが、続くワキ名ノリの立ち位置が変わるので、その時間を稼

ぐ意味もあり、原版とは異なり次第をもう一度、今度は高音で謡う(二度目はカエシを省き「来たれる方も去る方も。知らねど運命。知らるる」と謡う)。

・ワキ、弓を杖に突きつつ出て、(三ノ松ではなく)一ノ松で正面を向き「おう」と名のる(原版では三ノ松に立って初め横向きで名のり、「昔天なる」から正面を向くが、これを改める)。「我が仕ふるアポロンの神」とたっぷり言い収めつつ正にツメる。

・ワキ、「我が神の示しに」と以下謡いつつ常座に立つ。そのまま「何に遭はせ給ふや」の後の笛一管で右ウケ、天を仰ぎ「アポロンは天空にあり」と言う。

・ワキ、「あまりに苦しき旅路」と謡いつつ正中まで歩み、正面を遠く望み、「あゝ曠野は」と謡う(原版では常座)。「大地は骨片を敷くに似て白し」まで不動そのまま立ち尽くす。原版では笛一管しばらく残り、常座に立つワキの所作があるが、今回は所作はなく、「骨片に似て白し」と謡一杯に笛を吹き止め、吹き残さない。

・ワキ、「や、此れなる丘の窪に」で正先向こうを見る。

・ワキ、「不思議ながらも」とアユミ、正先のカマチ際まで行き、下に居、弓杖を舞台板と平行に真っすぐ置く(原版ではこのあたりまだ常座に立っている)。

・地謡「清水の底の」でワキ、懐中から扇を取り出し、広げる(打切も入るので焦らずとも間に合う)。「曇り濁りて」でカマチ下から大きく水を汲む。扇を平たく持ったまま上げ、そのまま左に流し、カマチ下を深く覗き見て、水の濁るのを見定める。扇を正に戻し、手前にカツパと傾けて汚水を覆し、そのまま両ユウケンのように大きく水を捨て、所作をし終えると同時に、ドッカーリ安座するのが「飲むべくもなく

あさましや」一杯に収まる（原版では立ったまま杖で水を探り、常座に下がる）。

・「あさましや」と地謡切れるとすぐさま幕内でシテ「のうのう」と呼び掛け、地謡「愚詠業々」の内に幕を上げて出、三ノ松に立つ（原版では笛座前に角掛けて据えた作り物の背後から出る）。この間にワキは扇を閉じて懐中し、弓杖を突いて正中に行つて立ち、三ノ松を向く。

★原版では「愚詠業々」を「グエイ、ギョオギョオ」と謡っていたが、これは人間の「宿業（シユクゴウ）」と掛けた文句だから「グエイ、ゴオゴオ」であると思ひ、今回あえて改めた。

・ワキは正中、シテは三ノ松に立ったまましばらく掛け合い、シテ「誰彼よりも」でアユム。ワキは同時に正先のカマチ際に再び行つて下居、先ほどと同じ手順にて扇を取り出す。

・地謡「水に向かひて」（初句）でシテは一ノ松に立ち正先をウケる。地謡カエシでグイと前（欄干際）に出、右手でゆつたりと二度招く。ワキはここで水を汲み、今度は水を捨てずにそのまま大きく飲み干す。シテはアユミ、ワキの背後に立つ（あまり近づき過ぎないように）。ワキは水を飲み干すと扇を閉じて懐中し、弓杖を取り右肩にかたげ、そのまま（正先カマチ際に）下居。シテとワキと作り物と一直線に綺麗に並び静止するのが地謡「縁の水の頼もしき」一杯にはまる。

・ワキ「御出によつて」と言いながら立つて脇座に行き、常座に向く。シテは同時に常座に行き、正面を向く。「聴き取りがたきとは」でシテはワキへ向く。「なし得し時は」で正面に外し「いつよりぞや」で深くクモル。このあたり、立ち位置は異なれど演技は原版と同じ。シテ、「御姿を見奉れば」でワキへ向き、「昔を思ひ」で正面に外してクモル。「業劫の尽きる」で正面にツメル。地謡「愚詠業々」と繰り返す

間、シテは一種のイロエの心で舞台を小さく一周して常座に戻り正面を向く。面をツカウことはせず、何ごともなく脱力して一周したほうが良い（原版ではここでシテとワキと立ち位置を変えている）。

・ワキ「聞けば水面に」で正先をウケて下方の水面を見、「この蛙ヶ沼にてあるやらん」でシテに向く（原版では正先下の水面を見るが、今回はそうしない）。シテはずっと正面を向いたまま、「おう、その縁こそ」でワキに向く。続く語り「この沼の昔は」でカタリつつ正中に行き、よきところで正面を向いて下居。ワキはシテと同時に下居、真横（脇正面方向）を向く。原版では水をかき乱す型などするも今回は省き、下居のまま不動で通す。

・シテ「まして池に入り水をかき乱す」でワキに向く。ワキも同時にシテに向き、そのまま中人までシテを凝視したまま。

・地謡「叫ぶと同じく女は」とシテはスックと立ち（続く型が間に合わなければもう少し早く立つて良い）、「輝く女神と」で両ユウケンしつつ正面にグイと一足出、「われらは醜き蛙と」でタラタラと下がり、作り物前でズカリと安座。地謡「愚詠業々」で正面向いたまま深くクモリ、モロジオリ。このあたり原版とは大いに相違する。

・地謡「そのまま水に」でシテは安座のまま手下ろし、立つてゆっくり常座に行き、「聞こし召せ巫女」でワキに向き、「恐ろしの呪ひやな」でワキに向かってジックリとツメる。

・地謡「夕陽も」でシテは右ウケて幕を見やり、「芦影も」で少し左に身を振つて下を見る（以上、原版と同じ）。地謡「蛙の声も重くれて」で右に取りアユミ、そのまま三ノ松まで行き、「蛙の精と名乗り捨て」で正面（やや正先をウケる）にサシコミ、ヒラキ、「沼面の水藻」で深く身をかがめつつ（二三輪）誓納の如く、水衣の両袖を上体にかづき、

そのまま後退しながら地謡一杯に幕に入る。ワキはずっとシテを見て  
いるが、地謡「水の底に沈みけり」のカエシでシテが幕に入ると真横  
(脇正面方向)を向く。原版ではシテは舞台の作り物に中入し、ワキは  
鏡板前にクツログので、以上の部分は全く異なる。

・中入後、笛一管をかぶせた地頭の独吟「業・劫。沼は深し数千年。そ  
の昔の再び。現るゝ幻こそ。うつゝの中のうつゝ」は、原版のよう  
にセリフだと生硬で聞き苦しいので、拍子不合の流麗な謡に替える。

### 間狂言

・老蛙、幕の下を少し上げた隙間から這い出し、蛙飛びで二ノ松まで行  
き、立つ。原版では作り物の背後から出て舞台にいるのでつくばった  
ままだが、橋掛りでそれだと客席から見えないため、名ノリの時は立  
つことにする。

・老蛙、「ブクブクブクブク」と水に沈む型、「スルスルスルスル」と一  
ノ松まで泳ぐ型。ここから蛙飛び、「やっとな」で常座に出る。以下、  
コトバの内に舞台を這って左に回り、「まどろまうと存ずる」で脇座前  
に横臥する。折々、型や所作を随意に織り込む。このあたり原版どお  
り。

・里人出て一ノ松で名ノリ。「まことに」以下、カタリながら舞台に入り  
一周、「叱られなんだと申す(承る)」で正中に正面向いて立つ。この  
あたり原版どおり。「ハーツ、真に(さても)」と正先へ出て下の水面  
を見込む。「いたはしき事かな(あはれなことぢゃ)」で合掌。このあ  
たりも原版どおり。

・「地酒を(二つ)用意(いた)した」で里人は腰の瓢箪を取り出して正先  
カマチ外に酒を注ぐ。そのあと角に行き、「ヤットな」で座る。以下、

扇を開いて杯とし、瓢箪を取って手酌で飲む。この部分、原版では小  
さな酒器を用いるが、客席から見て分かりにくいのでこれは止め、朱  
房をつけた大きな銀塗りの瓢箪と扇を用いる。

・老蛙、起き直り、里人を伺い、「ポッチャン」と一つ跳ねて脇座(先ほ  
どより少し奥)へ行く。そのあと里人へ少し寄って孫だと気づき、飛  
びながら近寄ると、里人は手酌をしまう。このあたり原版どおりで、  
細かな演技は随意。

・里人「このひき蛙は」と言いながら立って扇を腰に挿し瓢箪を後腰に  
つけ、「あちへ失せい」と拍子を踏んで蹴る型。老蛙は飛び退り「これ  
はいかなこと」。以下、老蛙が里人の足に取り付き、里人はつづてを  
打つなど原版どおり。工夫随意。やりとりの果て、里人は老蛙の襟首  
をつかむようにして横板まで行き、「ヤットナ」と擲つと、老蛙と「ギ  
ヤツ」と鳴いて一ノ松に飛ぶ。里人が近づいて「ヤットナ」と足拍子  
踏むと、老蛙「グチャア」と潰れ死んだ態で仰向けになる。このあと  
蛙の死骸を蹴転がし笑いながら里人が幕に入るまで、原版どおり。

※間狂言は、老蛙の登場の仕方と里人の酒器と、この二点以外さしたる  
変更はない。演技は随意に工夫されたい。

### 後場

・笛一管をかぶせた地頭独吟「愚詠。業ゝ、沼は深し数千年。その昔の  
再び……」は、中入後と同様、拍子不合の流麗な謡に替える。

・地頭独吟の間に、ワキは弓を右手に持って立ち、右ウケて作り物に向  
かい少し出、下に居る。弓は終始、垂直に立てたまま。「アポローン」  
のイロ節に合わせて二度、大きく音立てて弓を突く。

・小鼓ノットを打つ間、ワキは立って脇座に戻る。弓は床に突き垂直に

立てたままにする(降霊招神の心である)。この間、シテはカヅキをかづいて幕から出、一ノ松で下に居る。地謡「恐ろしや」でカヅキを後ろに脱ぎ捨て、立ち上がる。同時にワキはシテに向く。ワキ「姿は蛙、声は人」でシテはアユミ、「その一日は巡り来て」で常座に立ち「御巫女よ」でワキに向かってツメる。このあたり、舞台の作り物からシテが出る原版とは全く相違。

・地謡「レイトウの御子アポロンに」でシテは正中に行きワキに向かつて下居、「罪を宥めて」でワキへ合掌。続いてクセで正面を向くと(左膝を抱えても良い)、ワキも真横(脇正面方向)を向く。地謡「我と招きしこの因果」でシテとワキと向き合う。この手順は原版と同じ。

・クセ末尾「罪の報いぞ。恐ろしき」に続く「女は怒りて去りぬ。さて」は、地頭ではなくワキが謡う。原版では地頭の独吟だが、後場の祈禱後はワキが神懸っている心で、巫女が蛙の精の物語に入り込んでいることを示すため、このように変える。

・「我等も我が家に帰らん」でシテは立って正面を向く。「見えぬ手の手を」で拍子踏み重ね右にノリ、角の方にツカツカと進み「沼を離る、」で後退し正中で膝を突き、合膝返し、立って、「こはいかに」と左右に身を振り、大小前に下がり、ツカツカと正先に出、「水に映れる」でカマチ下の水面を一度見込んでギクリとなり、大鼓一調の内に常座まで後退し、大きく山道に出つつ再び正先まで行き、深く水面を窺う。このあたり原版どおりだが、今回また演者の発案による新たな工夫があっても良い。

・シテ「こは蛙」で水面を見たまま不動。地謡「我が影か」で膝を突き、「見れども見れども」で両手上げて白頭に触れる(原版では左片手だけが、両手で大きく型を扱う)。地謡「皆々蛙に変はりけるぞや」で立っ

て正中まで後退し、大鼓のカシラに合わせて両手打ち合わせつつ右ウケ、下に居、ガタリと正面に向いて安座(このあたり原版どおりだが、原版では安座して右ウケ。今回は正面に向く。右ウケよりも正面を向いたほうが、女神の登場で背後からの支配感が強く出るためである)。  
・地謡「見返れば女は」で作り物の引き回しをスルスと下ろし、ツレが姿を見せる。この部分、原版ではアシライなしたが、今回は地謡にかぶせて笛の高音をテンション高く吹き合わせると良い。地謡「許し給へ我が咎」でシテは正面を向いたまま合掌し深くクモル。

・シテ「げに恐ろしき身の運命」で両手を下ろし、立っておもむろに橋掛りに行く。地謡「夜に入り村の人々」で二ノ松で正面を向き欄干際へ出、扇を松明に振りつつ立ち戻り、「この池の辺に尋ね来る」で脇正面で止まり、改めて左に回り込み、「我はこゝよと」で小鼓前から左手招きつつ正中向かって左に出、「甲斐無きも理や」で左手下ろし、正中まで下がりざま「彼は人」で右手サシ、「我は蛙」と正面に向きつつ扇で左胸打ちざま一足下がりが、「遠ざかり行く松明の」で右手サシながら右に取って幕の方を見込み、手下ろしつつ「見送りて」で常座に行き、そのままタラタラ下がって、「伏しまろび」で正中に膝突き(右ウケた形)、「声を限りに」で扇で床を二度打ち、「叫べども」で居立って無念の思い入れ。このあたり原版と同じだが、随意工夫があっても良い。この間、ツレは作り物内に厳然として不動を保ち、シテの所作には一切構ずにいる。

・シテ「我が持てる一人子の」と立って常座に行き、「そこやかかしこ」で面つかいしつつ正中へ出、角に向いて「ずるずると」で抜き足つかいしつつ角へ行き、目付柱に手を掛けて「溺れ死にぬ」と正面向いて安座、クモル。この最後、原版ではやや左に身を振っているが、正面を向い

たほうがキツパリとして良い。ほかは原版どおり。

・地謡「それのみか我が妻の」の打切でシテ立ち、左に回り、扇を開きつつ正中で正面に向きサシコミヒラキ、「夫・我が子の幻を」でサシつつ右に回り、「追い求め」で脇正面から面つつさいつつ正中に出、膝突いてから扇を胸に当て、抜き足しつつ二つ小さく回り、「これも空しくなりにけり」と深く右をウケて下に居る。これも原版どおり。

・このあとシテは下に居たまま正面を向き、「あまりにむごや凄まじや」はそのままだ不動。「取り付き嘆く」で立ち、正先カマチ際まで出、「骸は歳月に白骨と変はれども」で扇を左胸に当てる下の水面を深く見込み（都合で階に片足踏み込んで下に居ても良い）、「我は変はらぬ」と手下ろして少し退り正面遠くを見込む。このあたり、水衣を骸に見立てて扱う原版とは大いに異なる。今回は作り物の扱いが異なり、また、そのためだけに水衣を出すのも唐突であるため、水衣の型は取り止めた。

・地謡「沼蛙永劫の変身」でシテは扇を畳みながらアユミつつ橋掛り一ノ松に行き、「取り次ぎ給へ巫女」（間に合うようならばその前の「助けて給べや神々」で正先に向き立ったまま合掌。この合掌をきっかけに、それまでシテに向いていたワキは真横（脇正面方向）を向く。シテは地謡「愚詠業々」の反復の間に三ノ松まで行き（小廻りしながらでも良い）、左袖をかづき、吸い込まれるように後退しつつ幕に入る。幕下りて幕内からシテ独吟「愚詠業々」と一句謡う。この部分も原版とは全く異なる。

・地謡「来たれる方も」の間にツレは静かに立って作り物を出、扇を開きつつ正面向いたまま正中あるいは正先に立ち、「知らねど」で右袖、「運命」で左袖を巻き上げてキツパリ決まり、地謡一杯にトメ。

・原版では「来たれる方も」で大小が床几から下り、笛一管を残したまま作り物を引きくなどするが、これらは止めて、常の能どおりに終わる。

### 【付言】

劇作家・演劇評論家として文字どおり鬼才と呼ぶに値した堂本正樹（一九三三年十一月一日～二〇一九年九月二十三日）に、私は一九九二年以来、格別の交誼を忝うした。堂本がその前半生を懸けて兄事した三島由紀夫との秘事を聴かされたこともたびたびである。古典芸能のみならず舞踊一般、現代演劇ほか、時として鞘走りはしても筆鋒あくまで鋭いその言説に照らせば、決して多いとは言えない単著の内、記念すべき初著である『僕の新作能 堂本正樹能楽台本集』は私家版のため奥付を欠いている。堂本本人も忘却して正確な出版年月日が分からないが、数巻に互り同書を翻刻している『未刊謡曲集統一』（田中允編・古典文庫第四九一冊・昭和六十二年九月）所収の堂本新案〈綾鼓〉解題には昭和三十年〇一九五五年の刊行と考証される。すなわち、新作能〈蛙ヶ沼〉は堂本二十二歳以前の執筆ということになる。

執筆以来、上演の機会を得なかった〈蛙ヶ沼〉が初めて舞台化されたのは一九九九年である（東京「能劇の座」および大阪「大槻文蔵の会」）。シテ・蛙の精を演じたのは、堂本とさまざまな試みを共にした大槻文蔵で、当時まだまだ元氣だった堂本本人の創意を反映して上演された。が、爾来、再演されることがなかった。

今回、長期療養の果てに惜しくも長逝した堂本の没後三年に当たり、これまで私と幾多の能の新演出を共に創ってきた文化功労者・人間国宝たる大槻氏の徳憑を受け、世代こそ違え堂本氏への追慕を同じくする者同士、新たな〈蛙ヶ沼〉を制作できたことに、まことに深い感慨がある。

自己主張の強い堂本氏であるから、生前の習いだった弾丸トークの早朝電話で「キミねえ！ それは違うよッ！」と反論される部分もあるかもしれないが、反面、黙役の女神レイトウを出す趣向など、拙案の随所に堂本氏は膝を打って賛意を示されるようにも考える。

いづれにせよ、コロナ猖獗による舞台公演の不自由を縫って、長年の協働を重ねた大槻文藏氏と一緒に「堂本正樹追悼公演」が実現できたことは、まことに良かった。将来また時を得て今回拙作版の再演が叶うならば、故人へのさらなる追福となるだろう。その折を鶴首して待ちたいと思う。

#### 当日の番組

【日本全国 能楽キャラバン 大槻文藏が舞ふ！】

二〇二三年一月二十八日（土）午後二時 大阪・大槻能楽堂

★お話「亡憶の声／堂本正樹と〈蛙ヶ沼〉」村上湛

★新作能 観世流〈蛙ヶ沼〉

前シテ（男）大槻文藏／後シテ（蛙の精）大槻文藏

後ツレ（レイトウの女神）大槻裕一

ワキ（アポロンの巫女）福王知登

アイ（老蛙）茂山逸平／アイ（里人（孫））茂山慶和

囃子 笛・斉藤敦／小鼓・清水皓祐／大鼓・山本哲也

後見 赤松禎友／武富康之／上野雄介

地謡 山本博通／浦田保親／寺澤幸祐／齊藤信輔／山田薫

以上